

10周年特集号

No.7

2001. 6. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

■発行 特定非営利活動法人
地球の木 理事会
■発行責任 横川芳江
■編集 広報部
■事務局 〒222-0033
横浜市港北区新横浜2-8-4
TEL 045-471-5536
FAX 045-471-5543
E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp

CONTENTS

- 10周年を迎えて
- 10周年おめでとう
- 座談会<男が見た地球の木>
- 支援地から<2001年の計画>
- スタディーツアー報告<ネパール・フィリピン>
- 北朝鮮訪問記
- 学校に行こう！
- INFORMATION

10周年を迎えて…

理事長 横川 芳江

1991年7月3日、グローバル市民基金・地球の木はエチオピア飢餓支援をきっかけに、小さな力ながら大きな希望をもって発進しました。アジアやアフリカの現地の報告を聞いて、どこの人びとも活力と可能性に満ちており、私たちが少し力を貸すことで、相互の自立につながることを学びました。そのため市民基金として国内外の団体に資金を提供し、地球的な市民の連帯で、経済優先の私たちの暮らしを変え、社会構造を変えていこうと考えたのです。

それから10年、基金化はなされませんでしたが、NGOとしての活動は確実に進み、2000年4月には、特定非営利活動法人・地球の木として新たな出発を果たしました。現地の人びとの連携によって、一昨年はタイからシニット・シティラックさん、昨年はニルマラK.C.さんとシュレスタ教授を招いて、シンポジウム、地域フォーラムを開催し、「開発」を問い合わせてきました。

私たちを取り巻く環境破壊や南北格差などの問題は、この10年さらに広がっています。しかし、21世紀を「人間性を中心とした時代」にしようという変革の兆しも見えてきました。ニルマラさんは経済優先の「グローバリゼーション」に対して、人間性を主体とした「ピープリゼーション(peoplization)」という新しいことばを提唱しました。これは地球の木に設立当初から貫ぬかれている理念「People to People—人と人が支えあう社会」と重なっています。これからも「地球上のすべての人びとと共に歩む」ために、グローバルな視点で、地域に根ざした社会活動や開発教育活動を続けていきます。

これまで、多くの方々に支えられて歩んできました。心から感謝申し上げます。これからも、熱い心と、「小さな一步」で、地球の木を支えてください。



ニルマラさんシュレスタさんと共に（右端が筆者）

シュレスタ教授が、地域フォーラムで話されたことばを、みなさんにお伝えします。

人びとには一人ひとり役割がある

太陽はすべての人にそそぎ、エネルギーを与える

川はすべての人びとに 命の水を与える

空気は見えないけれど、

すべての人が吸って、生きている

わたしたちには眼がある

わたしたちには耳がある

わたしたちには口がある とても重要なものだ

耳がなく、口がなく、眼がなくとも、わたしたちには生きる命がある 心がある

わたしたちは太陽や水や空気によって生かされている
もって生まれたものは貴重だ もって生まれたものを人のために役立たせることが大切だ

小さな事でも人の役に立つことは

自分の心によろこびをもたらすだろう

ふつうの人が 普通の人間以上の力を持っている

ふつうの人と人が力をあわせて

偉大な力をつくりだす

未来にむけて 力を合わせよう

地球の木10周年おめでとうございます



助け合う仲間として

JVC(日本国際ボランティアセンター) 代表 熊岡 路矢

創立以来10年間、私たちJVCとその活動を支え、あるいは提言活動などにおいて連携して動いていただき有難うございました。日本においてもNGO(市民による国際協力団体)が海外現場での救援や開発協力活動にもとづき、政府・国際機関への提言を果敢に行なうようになりました。たとえばカンボジアにおいて、JVCも80年代から和平・和解の実現や援助の均衡を求めNGO共同アピールに参加しました。和平が実現した後は、拙速に始められた日本政府による農薬援助に対して停止を求める運動を起こし、日本国内では、「地球の木」の皆さんはじめ多くの市民・消費者の運動とも連携し成功させました。

今日、政府=官中心の旧来システムが機能しなくなるなか、NGOやNPOの役割はますます大きくなります。今後「地球の木」として、自らが実働型NGOになっていくのか、あるいは、海外=世界の問題に向かう中で地域社会の活性化により多くの力を注いでいくのか、在日外国人問題等に取り組んでいくのか、の議論が交わされると思います。NGOが単独でできることは限られていますが、アンテナを張り「人」のネットワークを広げ、助け合う仲間として励まし合い、厳しい現状を生き延びて行きましょう。

地球市民として連帯を

生活クラブ神奈川 理事長 大島 朝香

私は設立からのメンバーで、当時会員拡大のために学習会などをすいぶん行なったことを懐かしく思い出しました。学習会を重ねるにつれ、経済、政治、社会的危機によって人間として生存を脅かされている人々が地球上に大ぜいいることや、ODAによる援助がさらなる貧困や破壊を招いていること、私たちの暮らし方にも責任があることなど様々なことを知り、ショックでした。

私は、人と人の相互理解を基本とした本当に必要な自立を助けるための支援が、「自分さえよければ」という考え方をしない生活クラブ運動の中から生まれたのは必然だったと感じています。この10年、地球の木が国境を越えた連帯づくりをし、アイデンティティーをもちながら広がってきていることは、私たち生活クラブにとっても、とても大きな財産になっています。

グローバリゼーションによる世界システムが私たちの生活に大きな影響を与え、個人の生活そのものまでが危機にさらされていることに対しても、私たちは地球市民として連帯していくなければなりません。信頼と幸せに基づく社会を可能にしていくために様々な国の人々の生活に無関心でいることは許されないことです。私たちと同じ目線に立った地球の木の情報を今後さらに期待しています。



着実な成長を遂げて

(財)神奈川県国際交流協会 企画情報課長 小山 紳一郎

私が、初めて地球の木のメンバーと仕事で一緒にしたのは6年ほど前のことですが、当時、地球の木の活動は、日本の開発協力NGOへの資金協力と開発問題をテーマとする地域での学習会が中心でした。

その後、地球の木は、「南の国」へのスタディーツアーを企画したり、自らの手で開発教育教材を作成するなど、新しい事業分野を積極的に開拓してきました。さらに最近では、地球の木本来の活動に加えて、NGO同士のネットワークづくりや自治体への政策提言活動にも意欲的に取り組んでいます。このように、地球の木は、過去10年の間にNGOとして着実な成長を遂げてきました。21世紀を迎えた今も、環境破壊や南北格差の問題など、地球規模の課題が山積しており、こうしたグローバルな課題の解決に、NGOの果たす役割は益々大きくなると言われています。どうかこれからも、「生活者の視点から、足元の問題をグローバルな課題と結びつけて考える」発想を大切にして、地球の木ならではのNGO活動を続けていって欲しいと思います。



女性ならではの現実に即した発想と行動力

(財)横浜市国際交流協会 活動支援課チーフコーディネーター 村井 昭子

「地球の木」の皆さんとは「第1回横浜国際協力NGO祭」での実行委員会以来、あしかけ5年のつきあいです。国際ボランティア講座、世界食糧デー記念シンポジウム、開発教育等で出会ったNGO団体の中でおそらく一番多くのメンバーと知り合ったと思います。プログラムが多岐にわたり人材に厚みがあること、各人がのびのび仕事をしつつなおかつ、組織の本質や求心力が失われないところが魅力です。

また、環境問題や食を通じた国際協力への取り組みは机上の空論ではなく、家族の健康を守り慈しむ女性ならではの現実に即した発想と行動力に支えられ貴重です。市民と行政とのパイプ役として幅広い市民ニーズに応えるべく諸事業を進める当協会にとって学ぶべきことが多いと思っています。ひとりでは何もできない、しかしひとりでも行動しないと解決できない社会的な課題に一緒に取り組みたいと考えます。

NGOとの連携で開発教育に突破口が

横浜市立市場中学校 教諭 力丸 剛

これまでの国際理解教育は、講演を聞くなどどうしても受け身になりがちで、生徒たちは南の国の人々とどう関わっていたらいいか、自分たちの生き方とどう関連させたらよいのかが結びついでいませんでした。そこで試行錯誤の末たどり着いた結論は、非政府組織(NGO)との連携を計り、アクティビティ、開発教材などを用いた体験的な授業を実施したいというものです。

手探り状態で連携先の模索を始めました。そんな中、地理の授業に使おうと購入しておいた「マジカルバナナ」の教材から「地球の木」にたどりついたのです。さっそく、国際理解教室を依頼しました。そして7月に3年生から実施のはこびとなったのです。事前学習の重要性を配慮しなかったため、初回は生徒たちの反応がいま一歩という結果に終わりましたが、「地球の木」と話し合いを重ね、実施前にデモンストレーション授業を行なうなど、担任また授業にかかる他の教師の理解を深めてから実施したり、ファシリテーターの人数を増やし、よりきめ細かく生徒に対応するなどの方法をとりました。

以後、12月に2年生、3月に1年生を対象に国際理解教室を実施してきました。そして徐々にではありますが前に進んできたように感じております。



これからも「地球の木」が学校教育の現場と密に連絡を取り合って、開発教育に新しい風を吹き込んでいくことを期待します。



男が見た地球の木

「お母さんたちのNGO」と呼ばれてきた地球の木の活動にも、うれしいことに最近、男性会員の参加が増えてきました。
サラリーマン生活を経験してきた会員にとって地球の木はどんな魅力があるのでしょうか?
女性たちの活動をどう見ているのでしょうか?
昨年のシンポジウムのパネリスト、ソンさんのベトナム料理店「くうえとい」に集まつていただき、ベトナム料理に舌鼓をうちながら大いに語ってもらいました。

女性の元気に脱帽

乳井 サラリーマン生活から地球の木の活動に参加して、新鮮に感じることはありますか?

山本 先ず感じたのは、女性は元気で活発だなということです。家族を置いてネパールへ行っちゃうんですから、いやあ、びっくりしましたね。男性はリタイアしてからすんなりと地域活動に入りにくいものです。

乳井 地域に根を張っていないかったということですか?
山本 朝、家を出て夜帰宅する会社人間でした。リタイアしてからやりたいことが一杯ありましたが、いろいろやってもまだ暇がある。遊びだけではもの足りなく、地域で何かやりたいと思うようになりました。会社のような縦の繋がりではなく、地域での気の置けない仲間との横の繋がりが欲しくなります。

長浜 しっかりした理念を持った活動団体、というのが私の第一印象ですね。現地の活動だけに終わらないで、中学校への出前講座などを開いている点がいいですね。活動の意義を若い人たちに知らせてみんなと一緒に考える。これはとても大切だし、それを実践している地球の木にとても魅力を感じました。

新井 南の国への支援金がどのように使われているか実際に見える点がいいと思います。その上、

現場に行って体験したことを伝えている地球の木のようなNGOは伸びると思いますよ。

乳井 男性の参加によって地球の木はとても活気づいたと思うのですが、男性はどんな面で貢献できると思いますか?

長浜 むしろ女性の方々から学んだことがたくさんありますね。女性の方々がこれほどまでにしっかりした自分の意見をもち、行動力があるとは思っていました。私を含めたサラリーマンを経験した、特に中高年の人たちを見ると、その中の多くの人は遅れているな…と思います。既得権にこだわってそこから抜け出せないでいます。女性にはもともと既得権の意識がないために、伸び伸びと活動しているように見えます。男性はもっと積極的に女性のもつ力を認識する必要があると思うし、女性自身も自分たちの持っている力をもっと認識していいように思います。

新井 同感です。ほとんどのサラリーマンは、1ミリでも早く出世したい、1円でも多く給料をもらいたい、そのためには何でもするという世界にいます。入社して35年以上もたつとその中からなかなか抜け出せない。でも女性はすごい!家庭の中に社会問題のいろんな原点があり、子育てや食料の問題、環境の問題に気がつくのが早く、ボランティアの世界では男性よりずっと



司会-乳井京子



和やかな中にも白熱した議論が続く…

みんなで広げよう「地球の木の理念」

進んでますよ。

乳井 地球の木の今後の課題は何でしょう?
米林 地球の木の特色を生かした活動をするとよいと思います。女性は交流するのがうまいし、いくつかの国の支援をしているということは、たとえば、森林の問題でラオスとタイチームがジョイントで何かをするというようなこともできるのではないかでしょうか?

長浜 活動を若い人たちにどんどん広げていくことです。他人の役に立つことの大切さ、異質なものを尊重し、受け入れる心を持つことは大人になってからではなかなか身につかない。今、日本が直面しているいろいろな問題は、元を正せば大人たちが本来若い時身につけておかなければならなかったことが、身についていなかったことに起因していると思います。

新井 会員をつなぎとめ、賛同者を増やしていくなくてはなりませんね。そのためには会員一人ひとりが自分が住んでいる地域でその輪を広げる工夫を積み重ねていくことが重要ですね。

乳井 皆さんはこれから地球の木で何をやっていきたいですか?

新井 自分の住んでいる地域から活動を始め、ネットワークを広げることにより「地球の木の理念」

を一人でも多くの人に理解してもらいたいですね。

長浜 私はまだ、現地に行って直接見たり、話し合ったりする機会がないので、活動しているという実感が乏しいのが正直なところです。先ず、現地に行くことが私にとっての最大の課題です。また、今はたまたま「なんぶ」に所属していますが、地球の木にはいろいろなメニューがあるので、それらも機会があれば見たいと思っています。

米林 できるだけ具体的な活動を積み重ねていこうと思います。

山本 接点を見つけ、じゃおクラブと一緒にできることはやっていきたいですね。情報交換もやりましょう。

乳井 今日はほめられっぱなしでしたが、男性メンバーも生き生きと活動ができる地球の木でありたいと思います。楽しいお話をありがとうございました。

(記録 丸谷士都子)



男性会員大歓迎!!



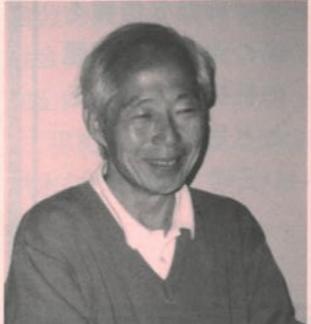
新井克巳さん

現役サラリーマン。地域で様々なボランティア活動を経験した後、地球の木の活動に共鳴して会員となる。定年後には世界の人たちと知り合うために2年間世界放浪の旅へ出る計画。



山本健介さん

地域フォーラムをきっかけに地球の木に入会。今年古希を迎える。じゃおクラブ運営委員。湘南地域で永田農園での援農・野菜づくりの他、勉強会・趣味の会・地域ボランティア活動などを楽しむ。



長浜元十さん

YOKEのボランティア講座で地球の木を知り会員に。昨年定年退職。「人は死ぬまで人間として成長し続けなければならない」とライフワークとしてのボランティア活動を模索中。



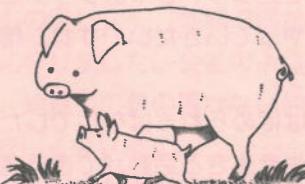
米林大作さん

'91年に入会。'96年以来理事として活動。ネグロス、タイ、ネパールの活動に関わっている。世界のあちこちを歩き回った経験は誰よりも豊富。

フィリピンから

自然循環型農業

現在ツプラン農場では、豚は子豚の出荷が中心で、市場よりも安く、育て方の説明書などをつけて出荷しています。本年度は、母豚を60頭にするのを目指しています。また、複合型の経営モデルとして、水田(合鴨農法)、畑(豆類、トウモロコシ、野菜)を中心にするため、サトウキビ畑を転換する予定であり、魚の養殖、アヒルの卵の生産と同時にミニ堆肥、市場のゴミを堆肥にするなど自然循環型農業への自立をめざし確実な運営を行なっています。BMW技術(注)も順調に稼働しています。大学機関でそのデータ作成も行なっていく予定です。



以前の6ヶ月研修の生徒は、確実に成長し村で活躍しています。本年度も6ヶ月、もしくは短期の研修が計画されています。

ツプラン農場では、さらに地域の農民の技術や経験の交流を実施に向けて計画中です。2001年度には、農場のサトウキビ畑をすべて水田か畑に転換する作物の多様化を進めます。生活面に関しては、闘鶏や飲酒に溺れる男性に対する教育プログラムを組むことも考えていることがあります。

(相模 広瀬康代)

(注) BMW技術…家畜の糞尿等を岩石の間を何度も通し、バクテリアのはたらきでミネラルが豊富な水にする技術。その水は人や家畜の飲み水になる他、飼料を作る時にも利用される。

ラオスから

女性の意見も反映

昨年度に引き続き、森林保全、自然農業、ジェンダー研修の支援を行ないます。

森林保全…新たに4つの村で村人の希望を聞きながら、利用林(生活に利用する森で家を建てるための木の伐採や食料として木の実などを採ることができます)、保護林(将来のことを考え木の伐採をしてはいけないが、食料としての木の実等を採ることは許されている)、精霊林(神の宿る森として敬われ、手をつけることはできない)等に区分けを行ないます。また、すでに区分けが行なわれた村で、利用林の管理、活用がうまくできていない所では、村人と共に考えていきます。

自然農業…共同農園において引き続き土壤改良を進めていくと同時に果樹の栽培に関する研修を行ないます。カムアンの村人とビエンチャンの村人ととの交流も行ないます。

ジェンダー研修…ジェンダーハンドブックを用いた指導法の研修を郡の役人男女に行ないます。また、女性の意見を村の委員会に反映させるための第1段階として女性に米銀行の経理の研修を行ないます。なお、

村の女性の意見を聞くため、現地に女性スタッフを採用しましたので、より細かな情報を集め現状及び問題の把握ができることがあります。

(三浦 若林英子)



カンボジアから

カンボジアは晴天なり



チャイルドケアセンターの子どもたち

女性と子どもたちは、今年もやる気満々で、どうやったらより良い生活ができるかを考えています。農村トロ村の孤児のための施設では、8名の子どもたちが仏教的道徳に基づく精神で元気に育っています。花壇の手入れ、トイレの掃除、毎週水曜日のスタッフとのミーティング、勉強などを行ない、チャーロッオウブルダイの良き気風が育ってきています。2001年秋には、新しい子どもたちを5人受け入れる予定です。石けん作り、プラスチックごみの処理など、周辺の環境を汚さない工夫を地球の木に教えて欲しいそうです。年長の子どもたちは自立に向けたプログラムを考え始めます。

また、少額貸付で小さなビジネスを起こしている女性たちは、最初の借金を返済していくそうです。家庭菜園を作り、鶏を飼い、芋をふかして売り、自分の技術や能力を生かして現金収入を増やし、社会的発言力を増し、子どもの教育や栄養改善を村全体で向上させていきます。

平和であることと地球温暖化、森林伐採による洪水などのないことを祈っています。

(ほくぶ 小泉恵子)

ネパールから

自立に向けての一歩が始まる

ニムディ村をモデル村にしようと話し合ってから2年経ちました。そして今年、この村の成人識字率はほぼ100%になります。

2000年1月から始まった裁縫教室参加者の技術は、カトマンズの縫子さんにひけをとらないほどしっかりとしていました。これからは各自が生地を借りて衣類を作り、女性たち自らマーケットリサーチをして村や市場で売れるかどうか試していきます。売れたら生地代を返す仕組みです。自立に向けてようやく第一歩を踏み出したところです。

10日間の野菜トレーニング・キッチンガーデントレーニングは大人気でした。農業は彼らにとって本職。質問にも熱が入ります。終了後、村の人たちから、年間を通してこのようなトレーニングをやりたいとの希望が出ています。

今年度は識字教室を基本に、裁縫トレーニングの効果調査、リーダートレーニング、小学校支援など、村の人たちと相談しながらプロジェクトを計画していきます。さらに全国のNGOリーダーを対象としたトレーニングをカトマンズ郊外で行なう計画もあります。意識改革によって潜在能力に気づかせ、村人の自発的な活動を支えていくSOARS方式がネパールの開発のあり方に一石を投じることを期待したいものです。

長期的には、これから3年で自立に向けたシステムづくりとさらに多くの村の成人識字率の向上をめざし、将来的には村独自で活動を続けていけるようにという展望があります。

SOARSは、政府や他のNGOにも働きかけて目標を達成したいと賛成してくれました。

(なんぶ 丸谷士都子)



ネパールスタディーツアー報告

Peoplizationをがらだで感じた！

「21世紀のパートナーシップ」

FROMヨコハマTOタンセン

ネパールチーム 米林 大作

昨年11月、横浜国際協力まつりに参加したSOARSのニルマラさん、シュリー・クリシュナさんの熱い思いがネパール西部タンセンの町で同様なシンポジウム開催を実現させた。シンポジウムにはタンセンの町民、極西部カイラリの村人、SOARS、地球の木のツアーメンバー、町長、マスコミ関係者など60名程が参加。横浜でパネリストから提起された「自分たちの足元の問題をしっかり考える・援助を前提とした支援に対する疑問・人と人とのつながりを重視した支援、交流の関係づくり」が再確認された。地球の木ツアーメンバーからは経済的発展や開発が幸せにならない日本と日本の現状を伝えることができた。普通の人たちがこのようなシンポジウムで生の声を交換することが「21世紀のパートナーシップ」に必要なことを感じた。



太鼓に合わせて踊る

佐藤 竜之（サッカー大好き大学生）

人と人との互いの長所や短所を認め合い、共栄していくことは、同じ国民同じ民族でも難しいこと、まして他国の人とは…、と以前は思っていた。

確かに、文化や風習、言語は違うかもしれない。だがその前に、僕らは同じ人間なのである。人間として持っている"心"は同じなのではないか。"心"と"心"で接し合えば文化や言語の壁など、なんと低いことか。

だが、その"心"を感じる為には、互いが直にふれ合い、互いを直に感じることが必要ではないかと思う。そして、例えどんなに遠く離れていても、互いを"心の中で感じる"ことが出来た時、Peoplizationに基づく21世紀のパートナーシップが完成するのだということを学んだ旅であった。

横山 美智恵

（和太鼓をネパールの村に響かせた中学校教諭）

支援というのは一方的なものでも、物と物だけの関係ではなく、その土地の人と語り合い、お互いを理解し、共に幸せになるために、何をしなければいけないのか考え、行動していくこと、つまり対等な人と人とのつながりから始まるのだということを、このツアーを通じて強く感じました。NGOの活動、ボランティアなど共感しながらも、自分自身は物と物とのつながりでしか関わったことがありませんでした。ツアーを終えた今、ツアー前の学習会で行なった「ネパールの村人を救う方法ランキング」（注）の順位はかなり変わりました。別な形で関わってみたいとも思うようになりました。ネパールの人たちとの出会いが私にたくさんのことを教えてくれたからです。

永井 ミサオ

（「食」を大切にするケア・ワーカー）

ネパールの人たちと話してみて感じたことは、考え方の根本は私たちと同じだなということだ。どこの国の人と話しても理解し合えるという自信を得た。交流会やホームステイ先で心のこもった食卓を準備して頂

くと、その人たちの真心が体にしみ渡ってくるのを感じ、感謝の気持ちでいっぱいになった。

そう、人間は説明はなくとも感じることができる。逆に言えば、心の持ち方は言葉より重要と言えるだろう。あふれる愛を携えて世界の人々と交流することが世界平和への第一歩であるから、一人ひとりの交流はとても尊いものだ。

交流会の時、あるネパール人男性が言われた言葉を思い出すたび、私は感動が新たになる。「私は300年働いて日本に行くことができないが、皆さんとこうして交流会をもてたことで、日本へ行ったような気持ちになれてうれしい」と。

（注）第2回ツアー事前学習会でおこなった、支援についてのランキングゲーム

フィリピンネグロス島青少年スタディーツアー報告 心は温かさでいっぱい !!



理事 中野 真理子

日本からのメンバーは大学生3人、高校生3人(男2人、女4人)の若者にJCNC(注1)からコーディネーターとして、イロンゴ語、英語共にバリバリのすごく頼りになるユキねえ(赤松さん)とお目付け役のおばさん2人(私たち)の総勢9人です。それにフィリピン側は、コーディネーターのラリーさんと青少年たち10人。

このツアーの大きな特徴はフィリピンと日本の若者たちが1週間を共に過ごすことですが、そのうち3日間をPAP21(注2)の支援地域のひとつサンフリアン村にホームステイしました。

ラリーさんの行なう何回かのワークショップを通して若者たちは自分の殻を少しずつ開いていきます。感情を表現すること、意見を述べること、お互いを感じあうこと、つながりあうことなどはいつのまにか自然に、国の大違い若者同士の垣根を取り払い仲間意識を育していくようです。

サンフリアン村での生活は、私たち日本人にとってはどれも初めてのことばかり。やしの葉でふいた屋根、竹を編んだ壁の超自然派の農家は電気もガスも水道もなく夜はランプの明かり、洗顔もトイレも水浴びも井戸から水を汲んで流します。またサトウキビをかじったり、村の少年がするすると登って獲ったココナッツのジュースを飲んだりも嬉しい初体験でした。でも一番はネグロスの人たちの温かさにふれたことだったと思います。村人たちのやさしい笑顔はどこかshyで遠慮深くしかも暖かい。そしてとにかく歌とダンス好き。子どもたちはきらきら輝く目をして大きい子が小さい子の面倒を見ながら群れて遊んでいます。便利さとあふれる物の中で暮らす日本の若者たちがネグロスで感じたことは、なにもなくても、いや、ないからこそ伝わってくる彼らのやさしさと人間同士のつながりの温かさではなかったかと思います。そしてこのサンフリアン村が強いられてきた過去の過酷な状況と戦いの歴史を聞いて、人々のやさしさの裏にある強さも知ったのでした。

私たち参加者にとってネグロス島はもうアジアのどこかの国ではなくなりました。仲良くなったみんなの暮らすこの島の明るい未来を祈らずにはいられません。

(注1) JCNC 日本ネグロスキャンペーン委員会

(注2) PAP21 現地NGO 21世紀に向けた民衆農業創造計画

参加者の声

- 心が温かさでいっぱいになりました。
- フィリピンにいる間は日本のことを考える暇もないくらい充実していました。
- 百聞は一見にしかず。
- 私たちは永遠に友達です。最高に楽しい時間でした。
- フィリピンに行ったからといって何も変わるはずはないと思っていたが、こういった考えは全部間違ひだった。ほんとうに行ってよかった。
- 都会にいると忘れていた人と人とのつながりがそこにはあって【自分がここにいる】と実感できた。

日 程

- 3/25(日) 朝7時半成田集合。マニラ経由ネグロス島バコロドへ。ツブラン農場泊。
- 3/26(月) 朝食後ツブラン農場見学。午後サンフリアン村に移動。
- 3/27(火)~3/28(水) サンフリアン村滞在。ワークショップ、夜は村人たちと踊ったり、歌ったり。
- 3/29(木) 日本、ネグロスの青少年たちで劇を作り、村人たちを観客に発表。
村の人々と涙の別れをして夕方ツブラン農場にもどる。
- 3/30(金) 午前中今回のスタディツアーリの反省会。
午後買物。
- 3/31(土) 帰国。空港までネグロスの青少年たちが見送ってくれる。抱き合って涙の別れ。



ワークショップが終わって絵の交換

みんなの心届けました

北朝鮮訪問記

KOREAこどもキャンペーン 筒井由紀子

子どもたちと筆者



「北朝鮮の子どもたちに暖かい心を届けよう！」キャンペーンにご協力いただきましてありがとうございました。皆様からの募金210,000円を含むキャンペーン募金で食用油と砂糖を購入し、黄海北道銀波郡と平安南道大同郡、そしてピョンヤン郊外沢岩の3ヶ所の協同農場にある子どもの施設に届けてきました。特に食用油や砂糖は不足しているため、現地ではとても喜ばれました。主に子どもたちの給食やおやつなどに使われます。その他、ピョンヤン市ルンラ人民学校の新入生へ「お祝いセット」として文房具や生活用品(石鹼など)を届けました。

<前年比100万トンの減産>

一年ぶりに訪れた北朝鮮でしたが、昨年は干ばつ、台風のため前年に比べ穀物の収穫量は100万トンの減産。この冬は過去50年で一番の寒さでピョンヤンでもマイナス27℃を下回りました。

現地水害対策委員会の李さんの話では「昨春の降雨量は平年の40-50%で50日間雨の降らなかったところもある」とのこと。視察に訪れた干ばつの被災地大同郡では、水不足のため本来水田であるところにトウモロコシを植えましたが、田も畑も水がなく、そば栽培さえうまくいかなかつたそうです。

しかし徐々に国交を正常化していく欧州をはじめとした諸外国や韓国からの支援と、ここ数年来の経験や工夫からか、人々や街の様子（車の

電灯のつきぐあいなど）もピョンヤン周辺を中心として、状況が少しずつ良くなっているのが伺えました。

<国連機関も日本に期待>

国連機関・NGOの人たちが、私たちが目にすることのできない遠い地方の様子を報告してくれました。北部の新義州では2歳になるのに這うこともできない栄養不良の子どもたちが見つかったそうで、やや状況は良くなつたものの決して楽観視できないそうです。

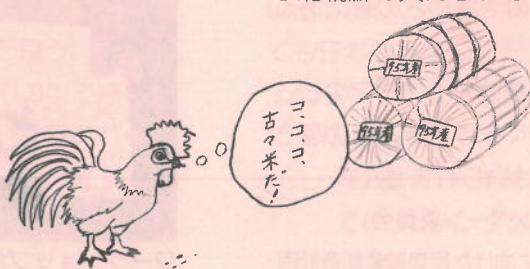
「これから4月、5月の春窮の時期を迎える、国連の食糧援助活動はあらたに800万人にターゲットを広げるんだ。日本からの米もこの時期に間に合わせてくれ」と資料を指差しながら国連人道調整官のオリバー・ホール氏は語気を強めました。日本政府が昨年約束した50万トンのお米のことです。彼は他にも「経済の建て直しが復興の鍵を握っている。北朝鮮が世界銀行やアジア開発銀行に加盟するためには日本の関与が必要だ」と日本への期待を次々に私たちに投げかけました。

<50万トンの米のゆくえは……>

昨年日本政府が発表した米支援は、WFP(世界食糧計画)の要請をはるかに上回る50万トンで、その規模や決定方法などあまりすっきりしないものでした。コストは1,200億円と言われていますが、タイ米を買えば100億円で済んだそうです。余剰米対策などこちらの事情が見え隠れしています。今回現地に行ってみると、あれから半年近くたったのに、日本から送られたお米は50万トン中わずか3万トン。大きく国際社会に宣伝した割には、この必要な時期にほとんど届いておらず、しかも95年産玄米と聞いた時には愕然としました。

度重なる自然災害に苦しめられながらも復興にがんばる北朝鮮の人たち、そして明るく生きる子どもたち。

この木はそんな人たちと「顔の見える」支援・交流をこれからも続け、NGO発の「北朝鮮情報」を皆さんに伝えていきたいと思っています。





学校に行こう！

国際理解教育の現場から

マジカルバナナチーム 嶋 一枝

去年の5月、市場中学校より地球の木に国際理解教育の授業の依頼があった。これこそ、私たちマジカルバナナチームが目指していた地球の木の活動を、学校の授業のなかで生かしてもらうチャンスだった。まず初めに7月に3年生、12月に2年生、3月に1年生の各学年5クラスで行なった。

授業の内容は「マジカルバナナ」「貿易ゲーム」「ネパールの識字教室」「フィリピンの子どもの絵から」であった。毎回、内容や方法を皆で工夫、検討する中で私たち自身も変わったが、受け入れ側の学校の意識も変わってきたのがわかった。

子どもたちの旺盛な好奇心に応えられるように、様々な角度からの情報を提供し、心に響く素材を準備することが、ファシリテーター(進行役)に求められていることがわかった。

普段は授業にあまり参加していない目立たない子から、90分という限られた時間の中で考えたことを引き出すことは難しいが、子どもたちの発言や表情にいつもと違う姿を見たという先生の感想があった。子どもたちの心の中に国際理解への关心が芽生えたことを確信した。また、先生方と根気よく話し合いを続けていったことは、大きな収穫であった。先生と市民の壁をどんどん低くしていくことが大切である。

★地球の木では、アクティビティを通して南北問題を考えたり、生活を見直したりするためのワークショップを研究しています。

また、「マジカルバナナ」や「ネパールわくわくバッグ」などの教材づくりも行なっています。

実践報告集「中学校での国際理解教育—NGO出前講座の実践と課題—」を作成しました。

ご興味のある方は事務局まで。

★★★子どもたちのアンケートより★★★

中3・世界は協力しあって行くことが重要だとわかった。

- 物や食べ物がないと生活するのは大変だけど、生きていく上で不幸と言うわけではないことがわかった。

- 贅沢しないようにと思った。

中2・バナナを作っている人たちが、こんなに苦労しているとは知らなかった。

- 先進国の日本では想像も出来ない生活をしている人がいるのが悲しかった。
- 消費者の立場からではわからない生産者の立場がわかった。

中1・子どもが働いているなんて信じられなかった。

- 私たちは裕福なので、これからは平等に分けてほしい。
- 日本はもったいないことをしていた。

力丸先生を中心に十数回の打ち合わせを行ない、まさに学校と市民が作り上げた授業だった。これからは学校と地域の結びつきが大切であることを強く感じ、メンバーのそれぞれが自分の地域の学校で、このような授業を持つことができるよう仲間作りをしていくことが大切であろう。

フォトランゲージ

写真から何がわかるかな？市場中2年生と



あたたかい応援ありがとう！ インド西部大震災募金キャンペーン

これからが大切、生活復興



早速たくさんの方から募金を送っていただきましてありがとうございました。各地域での募金も合わせ、3月末日までに**337,703円**が集まり、「かながわ被災地NGO活動支援委員会」に第一回の送金をしました。この「支援委員会」は、地球の木も構成メンバーとなり神奈川県国際交流協会や、他のNGOと共に設立したものです。

ご存じの通り、1月26日にインド西北部グジャラート州を襲った地震のために、100万人以上の人のが家屋や財産を失い、死者は3万人に達するともいわれています。今でも仮設の住宅やテントに住み不自由な生活をしている人がいることを忘れてはなりません。雨期になれば困難はさらに深刻になります。ここで復興の原動力となっているのは昔からの地域の助け合いです。無数の人々が、救援のために全力を尽しました。NGOの力がここでも効力を発揮しています。

阪神淡路大震災の時には、緊急救援が数ヶ月に集中し、その後は関心が低くなっていました。本当に必要なのは生活復興に向けたこれからの支援です。「支援委員会」では、今後は、DMI(災害軽減研究所) SEWA(女性自営労働者協会)など、住民主体の開発、災害復興の活動を続けていた信頼性の高い現地NGOに支援金を送ることを検討していきます。

現地調査も視野に入れて検討していくので、引き続き募金をよろしくお願ひいたします。 (横川 芳江)

INFORMATION

VISION特別講座

「生活クラブ運動」を英語で話そう (中学レベルの英語を使って)

日 時	6/21(木) 6/28(木) 7/5(木) 7/12(木) 7/19(木) 16:00~18:00
場 所	オルタ館VISION
対 象	地球の木会員、生活クラブ組合員ならびに運動グループ会員
講 師	永島順子 植野道子 ドニー先生(VISION 英語会話講師 3回目、5回目に参加)
共 催	地球の木・VISION
参加費	10,000円(地球の木会員は10%引き)

第19回開発教育全国研究集会

～今、教育を変えるのは私たち～

学校が、教育が、大きく変わろうとしている今、開発教育について学校教育、地域市民、NGOは一体何ができるでしょうか?学校を具体的に変えていく方法を皆で探ります。

日 時	8月3日(金)~8月5日(日)
場 所	川崎市国際交流センター (東急東横線元住吉駅より徒歩10分)
主 催	開発教育協議会
参加費	8,000円(会員・学生6,000円)
問合せ	地球の木事務局

肌で感じ、人とふれ合った スタディーツアー・現地調査大報告会

日 時	7月30日(月) 10:30~16:30
場 所	産業貿易センタービル9F (財)横浜国際交流協会 会議室A
参加費	500円
地球の木会員がフィリピン、ネパール、タイ、北朝鮮などを訪れて感じたことをリレー報告します。	

広報・編集ボランティア募集

会報を作つてみたい人、パソコンのできる人、イラストの好きな人大歓迎。事務局までご連絡下さい。

ラオス報告会「ラオスは今」

日 時	6月29日(金)13:00~15:00
場 所	県民サポートセンター 711号会議室
主 催	国際交流ボランティア「みなんと」グループ
報告者	地球の木 ラオス担当
参加費	資料代100円(お茶付)
問合せ	地球の木事務局

●2001年フィリピンとネパールのスタディツアーレコード集をご希望の方は事務局まで

●ホームページ

<http://homepage1.nifty.com/EarthTree/Index.html>